

陳陽孟子訓義校釈 (一)

児玉憲明

〔前言〕

ここに注解する「孟子訓義」とは、陳陽『樂書』の卷第九十一から卷第九十五に至る計五卷をいう。『樂書』のうち卷第一から卷第九十五までは経書中の音楽関連の記事を抜き出して注解した「訓義」で、そのうちわけは「禮記」「周禮」「儀禮」「詩」「尚書」「春秋」「周易」「孝經」「論語」および「孟子」の訓義である。『樂書』の完成は元符三年（一一〇〇年）である。この時『孟子』は実質的に経書の地位をすでに獲得しており、「孟子訓義」の存在もそうした状況を反映している。

「孟子訓義」には合計二十章を収めるが、陳陽にはこれとは別に『孟子解義』と称する著述があったらしい。『東都事略』（卷第一百十四「儒學傳九十七」）、『宋史』（卷第二百五「藝文四、儒家類」）等に書名が記録されている。『孟子解義』は全十四巻とされるので、『孟子』全書に対する注釈だと推測される。しかし『孟子解義』はすでに失われているため、「孟子訓義」との関係を知る手がかりはない。

校釈の底本には宋刊本を用いた。すなわち『中国善本書提要』

（上海古籍出版社、一九八三年）等に載せる「宋刊本、蝴蝶装、存三十一卷二冊」（北京図書館蔵）である。今、本邦国立国会図書館に蔵する「國立國會圖書館攝製北平圖書館善本書膠片」所収のものを使用した。テキストの校勘に用いた主な版本はつぎのものである。

- 一、国会図書館蔵・宋刊本
 - 一、文淵閣四庫全書所収本
 - 一、光緒三年定遠方濬師刊本
- また樓鑰『樂書正誤』（「擇是居叢書初編」所収）も参考にした。

なお、底本は「中国思想史研究室」(<http://hyena.human.nigata-u.ac.jp/>)で閲覧に供している

以下の校釈は、原文、版本の校勘、翻訳、注釈、補説で構成されるが、「訓義」が掲げる『孟子』の原文については原則として訓読を示すにとどめ、現代語訳は省く。

樂書卷第九十一^a

孟子訓義^b

梁惠王上 梁惠王下

梁惠王上。

爲其^d聲音不足聽於耳與。

凡物動而有聲、聲變而有音。易曰、天數五地數五。則五聲者天地之道也。傳曰、人者統八卦、諧八音、舞八佾、以終天地之功。則八音者人之道也。樂通倫理而三才之道具矣。然則發之聲音、其有不足以形容之乎。

蓋肥甘者食之美而悅於口。輕煖^c者服之美而悅於體。采色者視之美而悅於目。聲音者聽之美而悅於耳。便嬖者使令之適而悅於意。爲肥甘不足於口歟、必將芻豢稻粱五味調香以養其口。爲輕煖不足於體歟、必將疏房越席牀第几筵以養其體。爲采色不足於目歟、必將彫琢刻鏤黼黻文章以養其目。爲聲音不足於耳歟、必將鳴鼓鐘彈琴瑟以養其耳。爲便嬖不足使令於前歟、必將衆侍妾盛官徒以適其意。凡此王之諸臣皆足供之、固知王之不爲是也。其所大欲、特在辟土地以廣之、朝秦楚以臣之、莅中國以君之、撫四夷以服之而已、豈難知哉。

〔校勘〕

a 「樂書卷第九十一」 四庫全書本は「樂書卷九十一」に作

る。また四庫全書本にはこの行の前に「欽定四庫全書」の一行がある。

b 四庫全書本は、「樂書卷九十一」と「孟子訓義」の間に「宋陳暘撰」の一行がある。方濬師本には「宋宣德郎秘書省正字陳暘撰」の一行がある。

c 「梁惠王上 梁惠王下」(三行目)「梁惠王上」(四行目)底本は「梁惠王上」の一行のみ。四庫全書本は「梁惠上下」に、方濬師本は「梁惠王上下」に作る。本卷には『孟子』の三章を収めるが、冒頭の一章が「梁惠王章句上」に属し、残る二章は「梁惠王章句下」に属す。思うに、本来はまず「梁惠王上 梁惠王下」(あるいは「梁惠王上下」と題して本卷に収める『孟子』の篇題を一括して示し、次行に第一章が属する「梁惠王上」が書かれるべきである。また第二章(「莊暴見孟子」章)の前には「梁惠王下」の一行が挿入されるべきである。『樂書』他の巻はおおむねそのような体裁をとる。よって改めた。

d 「爲其」 底本を除きこの二字なし。『孟子』原文にもなし。すなわち『孟子』は「爲肥甘不足於口與、輕煖不足於體與、抑爲采色不足於目與、聲音不足聽於耳與」に作る。『孟子』では、「聲音不足聽於耳與」は、上句の「抑爲采色……」を承るため「爲」字を省略したと考えられる。「輕煖」の句に「爲」がないのも同様である。「訓義」は「聲音……」の一句のみを掲げたため、意をもって「爲」を補ったのである。

うか。また他本に「爲其」の二字がないのは『孟子』原文に従って後に削ったものか。

e 「與」 四庫全書本「歟」に作る。今本『孟子』はいずれも「與」。二字通じる。

f 「輕煖」 四庫全書本のみ「輕暖」に作る。この句は『孟子』本文によるが、現行『孟子』の諸本はいずれも「輕煖」に作る。四庫全書本『孟子注疏』も「輕煖」。二字通じる。

g 「輕煖」 同前。

〔訳〕

其の聲音の耳に聴くに足らざるが爲か。

そもそも物体が動けば「声」が発生し、「声」が変化して「音」となる。『易』に「天の数は五、地の数は五²」とあるとおり、〈五声〉は天地をつらぬく摂理である。伝に「人は、八卦を統べ、八音をととのえ、八佾を舞うことで天地の働きを完成させる³」とあるとおり、〈八音〉は人の世の原理である。樂は倫理に通じており、⁴ 天地人の道がすべて備わっているのである。したがって五声・八音で表現するなら、形容できないことがあるだろうか。

「肥甘」は食物の高級なものであり口を満足させる。「輕煖」は衣服の高級なものであり体を満足させる。「彩色」は視覚の対象の高級なもので、目を満足させる。「声音」は聴覚の対象の高級なもので、

なもので、耳を満足させる。「便嬖」は指令を授けるにふさわしい者で、心情を満足させる。もし「肥甘」が口を満たすに足りないのが（戦争を始めたり、家臣を危険にさらしたり、諸侯に恨みを買ったりする）理由だといのであれば、芻豢稻粱五味調香といった美食があれば口の欲望を満たすことができよう。「輕煖」が体を満たすに足りないのがその理由だといのであれば、疏房越席牀第几筵といった調度品があれば体の欲望を満たすことができよう。「彩色」が目を満たすに足りないのがその理由だといのであれば、彫琢刻鏤黼黻文章といった裝飾があれば目の欲望を満たすことができよう。「声音」が耳を満たすに足りないのがその理由だといのであれば、鼓鐘を鳴らし琴瑟を弾じて耳の欲望を満たすことができよう。「便嬖」が君主の前で指令を授けるに足りないのがその理由だといのであれば、侍妾を多くし、官吏を充実することによって心の欲望を満たすことができよう。これらは王の臣が提供できるものばかりであるから、王がこのようなものをほしがっているのではないことを孟子はもちろん知っていた。王がことのほか欲しているのは、領地を拡大して自国を大きくし、秦国や楚国を臣下として朝覲させ、中国全土に王者として臨み、四夷を慰撫して服従させることにある。このことを推し量れないことがあろうか⁵。

〔注〕

1 「声（聲）」「音」、いずれも音響を、特に音楽で使用される

音（楽音）を意味する。「声音」と熟して使われる場合、「声」と「音」にほとんど区別はないことも多いが、二字を分けて用いる場合は意味の違いがある。陳暘はここで『孟子』の「聲音」を、「聲」と「音」に分けて解釈している。ここでの陳暘の理解によると、「声」がより根源的で素朴なものを指し、「音」の変化したものが「音」ということになる。『禮記』樂記の冒頭に「外界の現象に心が反応した結果、〈声〉が発生する。〈声〉が響きあつて変化が起きる。変化が一定の秩序を得たものが〈音〉である。〈音〉を連ねて楽曲とし、干戚羽旄の裝飾を加えたのが〈楽〉である（感於物而動、故形於聲、聲相應、故生變、變成方、謂之音、比音而樂之、及干戚羽旄、謂之樂）」とあり、人心が外物に感じて発生する〈声〉が変化して〈音〉となり、さらに〈楽〉として完成する過程が記されている。ここでの陳暘の定義もこれに沿ったものである。なお文献によつては「五音」という語が見えるが、これは「五声」の異称であり、樂器の総称である「八音」とは関係ない。また『孟子』告子章句下に「聲音顔色」の句が見えるが、これは「声音」の派生的な用法で、「弁舌」の意で用いられており、直接には音楽とかかわらない。

「物の運動によつて音響が発生する（凡物動而有聲）」は、『樂書』における「凡例」である。巻第九（禮記訓義「是故不知聲者不可與言音」条）に「凡物皆動而有聲、聲變而成音」とあり、巻第三十七（周禮訓義「鼓人」条）にも「凡物

動而有聲、聲變而成音」とある。また、より詳細な記述が巻第一百六（聲音通論）にある。巻第一百六の論述はつぎのようであり、ここ「孟子訓義」の論とほぼ重なる。「物が動いて〈声〉が発生し、〈声〉が変化して〈音〉となる。〈声〉の数は五つにとどまり、これは樂の〈道〉ではなく樂の〈象〉にすぎない。〈音〉の数は八つにとどまり、これは樂の〈象〉ではなく樂の〈器〉にすぎない。それゆえ、樂を論じるさいに『声』は樂の象、金石糸竹は樂の器」（『禮記』樂記）と説明されるのだ。『易』に『天の数は五、地の数は五』という。したがつて〈五声は天地の道〉ということになる。伝に『人は八卦を統べ、八音をととのえ、八佾を舞うことで天地の働きを完成させる』とある。したがつて〈八音は人の道〉ということになる。樂は倫理に通じており、天地人の道がすべて備わっているので、『沖氣もつて和す』（『老子』の語）のである。『声・音』の上に表現する』というのとは、言うことがすべて徳にかなない、詠じることがすべて中正な〈声〉にあたるということだ。世の論者が『五声は天の音、八音は天の化』と説くが、不十分であろう（凡物動而有聲、聲變而有音、聲不過五。非樂之道也、樂之象而已。音不過八。非樂之象也、樂之器而已。此記樂者所以有聲者樂之象、金石絲竹者樂之器之說也。易曰天數五地數五、則五聲其天地之道歟。傳曰人者統八卦、諧八音、舞八佾、以終天地之功、然則八音其入之道歟。樂通倫理而三才之道具、則沖氣以

和。彼發諸聲音、所道者孰非中德、所詠者孰非中聲哉。世之論樂者謂五聲天音也、八音天化也、豈不偏乎」とある。

2 『易』（繫辭上傳）の句。「天數五、地數五、五位相得而各有合」とある。音楽の成立には音響の存在が不可欠であるが、それが音楽として成立するには何らかの規則にもとづいた音響（楽音）でなければならない。中国の伝統的な音楽は五音音階（宮商角徵羽）を基本とするものであったが、この「五」という数が人為的に定められたものではなく天地の法則にもとづくものであることを証するためにこの句が引かれている。しかし『易』が直接「五声」に言及しているわけではない。

3 『漢書』（律曆志上）の句。「人者、繼天順地、序氣成物、統八卦、調八風、理八政、正八節、諧八音、舞八佾、監八方、被八荒、以終天地之功」（人は天を繼ぎ地に順ひ、氣を序して物を成す。八卦を統べ、八風を調へ、八政を理め、八節を正し、八音を諧へ、八佾を舞ひ、八方を監、八荒を被ひ、以て天地の功を終ふ）とある。ここには人が天地の働きを継承して気を整えて物の働きを完成させる具体的な活動が列挙されており、その活動にすべて「八」が冠されている。五つの音響から構成される〈五声〉は、抽象的な概念であり、楽器（八音）を介して鳴り響いてはじめて現実の音楽となり人が感覚できるとする觀念が根底にある。天地の原理である〈五声〉が、人間が管轄する〈八音〉すなわち八種の樂

器によって人の世界に実現し「三才の道」が完成することを証するために、〈五声〉の論拠である『易』とともに引かれているのである。

4 「樂は倫理に通じ」は、『禮記』（樂記）の句。「樂者通倫理者也」（樂は倫理に通ずるものなり）とある。「樂記」のこの句に対する陳陽の解釈は、『樂書』卷第九にある。「樂爲音之蘊、音爲樂之發、故樂足以該音、而音不足以盡樂。音雖生於人心、未始不通於倫理。八音克諧無相奪倫、是也（樂）は〈音〉の集積で、〈音〉は〈樂〉の発散である。つまり〈樂〉は〈音〉を内包しているが、〈音〉だけで〈樂〉が成立するわけではない。〈音〉は人の心から発するものではあるが、はじめから倫理に通じている。〈八音〉がそれぞれの役割を十全に發揮し、万物がそれぞれの分に安んじて他者を冒すことがない」とはこのことだ」とある。

5 「肥甘」以下は『孟子』を文脈に忠実に敷衍したものである。『孟子』の文は次のとおり。「爲肥甘不足於口與、輕煖不足於體與、抑爲采色不足視於目與、聲音不足聽於耳與、便嬖不足使令於前與。王之諸臣皆足以供之、而王豈爲是哉。曰、否、吾不爲是也。曰、然則王之所欲大欲可知已。欲辟土地、朝秦楚、蒞中國而撫四夷也（肥甘の口に足らざるが爲か、輕煖の體に足らざるが爲か、抑も采色の目に足らざるが爲か、聲音の耳に聴くに足らざるか、便嬖の前に使令せしむるに足らざるか、王の諸臣みな以て之を供するに足る。而して王、

豈に是れが爲ならんや。曰く、否、吾れ是れが爲ならざるなり。曰く、然らば則ち王の大きいに欲する所は知る可きのみ。土地を辟ぎ、秦楚を朝せしめ、中國に蒞みて四夷を撫せんと欲するなり)。中間、「肥甘」以下の項目について、王の嗜好を満たすための具体的な品目や手段を述べる部分が『孟子』にはなく、陳暘による補充である。「便嬖」を除く四項目の記述は『荀子』(禮論篇)に依拠している。すなわち『荀子』には「芻豢稻粱五味調香、所以養口也、(中略)彫琢刻鏤黼黻文章、所以養目也、鍾鼓管磬琴瑟笙簧、所以養耳也、疏房櫛鬋越席牀第几筵、所以養體也」とある。「訓義」では、『孟子』の叙述に合わせるために項目の順序が変えられ、また文字に小異がある。

梁惠王下^a

莊暴見孟子曰、暴見於王、王語暴以好樂、暴未有以對也。曰、好樂何如。孟子曰、王之好樂甚、則齊國其庶幾乎。他日見於王曰、王嘗語莊子以好樂、有諸。王變乎色曰、寡人非能好先王之樂也、直好世俗之樂耳。曰、王之所好樂甚、則齊其庶幾乎、今之樂、由古之樂也。曰、可得聞與。曰、獨樂樂、與人樂樂、孰樂。曰、不若與人。與少樂樂、與衆樂樂、孰樂。曰、不若與衆。

先王之樂、其本存於欣喜歡愛之情、其末見於聲音。節奏之

文。探本知末者、知其情而能作。即末窮本者、識其文而能述。周衰樂壞、天下識情文者蓋鮮矣^d。故夫知聲而不知音者有之、知音而不知樂者有之。亦孰知夫樂與音相近而不同邪。蓋齊王所問者樂、所好者音。不悅先王之樂以樂民、直悅世俗之樂以樂身而已。尚何異魏文倦於聽古樂、晉平樂於聽新聲哉。此孟子所以有今樂猶古樂之說、庶乎王知反本也。今夫鄭之好濫、宋之燕女、衛之促數、齊之敖辟、慢易以^e失節流湏以忘本。此新樂之發、世俗之樂也。黃帝之大咸、堯之大章、舜禹之韶夏、商周之濩武、其聲足樂而不流、其文足論而不息。此古樂之發、先王之樂^h也。古今之樂、以本同、以末異。徇末以忘本、則古必異今。抑末以同本、則今亦猶古。古之所謂樂之本、不過「與民同樂而已。誠能因今樂」與民同樂、是亦古樂之實也。觀齊王悅南郭之吹竽、廩食以數百人。喜鄒忌之鼓琴、卒授之國政。彼其好世俗之樂、徇末忘本如此。又孰知與人與衆以反樂之本乎。此韓子所以有與衆之說、晏子所以有獨樂之戒也。孟子以齊王不能同樂於民、故語之以今樂猶古。所以引而進之也。子夏以文侯好音而不知樂、故對之以今樂異古。所以抑而攻之也。

〔校勘〕

a 「梁惠王下」諸本なし。四字補った。前章の「校勘c」を参照。

b 「王曰」底本「曰」なし。他本いずれも有り。また現行『孟子』も「曰」有り。『樂書正誤』も「王字下添入曰字」と

する。よつて補つた。

- c 「聲音」 四庫全書本「聲音」に作る。
- d 「鮮矣」 四庫全書本「矣」なし。
- e 「亦孰」 四庫全書本「亦鳥」に作る。
- f 「所好」 方濬師本「所知」に作る。
- g 「慢易以」 四庫全書本「四者皆」に作る。
- h 「先王之樂」 四庫全書本「先王之變」に作る。
- i 「不過」 方濬師本「不可」に作る。
- j 「今樂」 底本「今之」に作る。通じにくい。他本いずれも「今樂」に作るのによつて改めた。

〔訳〕

莊暴、孟子に見えて曰く、「暴、王に見ゆ。王、暴に語るに樂、を好むを以てす。暴、未だ以て對ふる有らざるなり。曰く、樂を好むこと何如」と。孟子、曰く、「王の樂を好むこと甚だしければ則ち齊國其れちかからんか」と。他日、王に見えて曰く、「王、嘗て莊子に語るに樂を好むを以てすと。これ有るか」と。王、色を變じて曰く、「寡人は能く先王の樂を好むに非ざるなり。直だ世俗の樂を好むのみ」と。曰く、「王の樂を好むこと甚だしければ則ち齊國其れちかからんか。今の樂はなほ古の樂のごときなり」と。曰く、「聞くを得べきか」と。曰く、「獨り樂を樂しむると、人と樂を樂しむと、いづれか樂しき」と。曰く、「人とともにするには若かず」と。少と樂を樂しむと、衆と樂を樂しむと、

いづれか樂しき」と。曰く、「衆とともにするには若かず」と。

先王の音楽は、その根本（理念）は欣喜歡愛の感情にあり、その末端（現象）は音の響きやリズムの裝飾に現れる。根本理念を探求することから実際の音楽を知る者は、音楽の実質を理解して創作することができる。音楽の実際の裝飾を觀察することを通して根本を理解するに至る者は、音楽の裝飾をわきまえてそれを述べ伝えることができる。

周王朝が衰微して音楽が崩壊すると、天下には音楽の本質や裝飾を理解する者が少なくなった。その結果、「声」を理解しても「音」を理解できない者が現れたし、「音」は理解できても「樂」を理解できない者が現れた。まして「夫れ樂は、音と相ひ近くして而も同じからず（「樂」は「音」と似ているようであるが、同じものではない）」²ということをだれがわきまえていただろう。齊王が孟子に質問したのは「（先王の）樂」についてであるが、齊王が実際に愛好したのは「（世俗の）音」である。齊王は、先王の音楽を愛好してそれによつて民衆をも樂しませるといふことをせず、もつぱら世俗の音楽を好んで自分自身の心を喜ばせただけである。これでは、魏の文侯が古樂を聞いて退屈したこと³や、晉の平公が新奇な音楽を聴くのを樂しんだ⁴のと違いがあるうか。（世俗の音楽を愛好することは、本来、王者が慎むべきことなのだが、にもかかわらず）ここで孟子が「今風の音楽も昔の音楽も同様だ」と述べたそのわけは、齊王が根本に立ち返ること

を願つてのことなのだ。

さて、鄭の音楽は心をかき乱し、宋の音楽は女色に耽溺し、衛の音楽は心を慌ただしくさせ、齊の音楽は心を昂らせる⁵。また、ゆつたりしすぎて節度を失い、流麗にすぎて根本からはずれてしまう⁶。これが新樂のありようで、世俗の音楽である。黄帝の大咸、堯の文章、舜の韶、禹の夏、商の濩、周の武⁷は、その響きは楽しくとも度を超えることはなく、その裝飾は論じることではできても論じ尽くせるものではない。これが古樂のありようで、先王の樂である。古今の音楽は根本は同じであるが、末端の現象においては異なっている。末端にとられて本質を忘れるなら、昔の樂は今のものとはまったく別物である。末端の相違をふまえて同じ本質をもとめるなら、今の音楽も昔の樂と同じである。昔の樂の根本はなにかというと、民衆といつしよに楽しむこととに尽きるのである。かりに、今の新しい音楽によつて民衆といつしよにそれを楽しむことができたなら、これもまた古樂の本來のありかたということになる。

齊王が南郭の人々が箏を演奏するのを愛好したため俸禄米をもらう者が数百人もいたこと⁸や、鄒忌の琴の演奏を気に入つていに国政を委ねたこと⁹をみよ。世俗の音楽を愛好し、末端にとられて本質を忘れるありさまはこのようにひどいものである。音楽を他の人々といつしよに楽しみ民衆といつしよに楽しむことで、樂の根本理念に立ち返ることを理解しているといえようか。韓子が衆とともにすること¹⁰を説き、晏子が一人で楽しむことを

戒めた¹¹のはこういうわけである。

孟子は、齊王が民衆といつしよに楽しむことができなことを問題だと考えて「今の音楽も昔の樂と同じ」という言いかたをした。「齊王が世俗の音楽を愛好することをしばらく容認し、楽しみを民衆と分かち合うように」励まして導こうとしたのである。子夏は魏の文侯が〈音〉と愛好するだけで〈樂〉を理解しないことが問題だと考えて「今の音楽は昔の樂とは別物だ」という言いかたをした。「文侯の誤つた認識を」退けて非難しようとしたのである。

〔注〕

1 この章に頻出する「樂(樂)」字を「音楽」とするか「悦樂」とするか、古來二説がある(小林勝人『孟子』へ岩波文庫)の解説に詳しい。「訓義」は、趙岐の注や孫奭の疏などの多くの注解と同じく「音楽」の「樂」と解している。なお「十三經注疏」所収の「孟子正義」は孫奭に偽託されたものであるが、以下の論述ではこれを便宜上「孫疏」「孫奭の正義」などと称する。

2 『禮記』(樂記)に見える子夏の言。「正装して古樂を聞くと眠くなるが流行の音楽を聞くと飽きることがない。この違いはいつたい何か」という魏の文侯の問いに答えたことばの一部。「今君之所問者樂也、所好者音也、夫樂與音相近而不同」とある。「訓義」の引用も同じ。

- 3 『禮記』（樂記）による。注①を参照。
- 4 『韓非子』（十過）に見える説話。晉の平公が樂師の師曠に禁断の秘曲の演奏を無理強いし、その結果、暴風雨に襲われ、晉国は三年間の大旱魃に苦しみ、平公も重病をわずらったという。
- 5 『禮記』（樂記）による。注①に同じく、魏文侯と子夏の問答に見える子夏のことばで、「鄭音好濫淫志、宋音燕女溺志、衛音趨數煩志、齊音敖辟喬志」とある。
- 6 『禮記』（樂記）による。世が乱れるとそれに呼応して礼樂も乱れることを述べる箇所。「是故其聲哀而不莊、樂而不安、慢易以犯節、流湎以忘本」とある。
- 7 先王の樂曲名称には異説が多い。『周禮』（春官・大司樂）の「以樂舞教國子、舞雲門、大卷、大咸、大磬、大夏、大濩、大武」に対する陳陽の注解（『樂書』卷第四十）、および『禮記』（樂記）の「大章、章之也」に対する注解（『樂書』卷第十五）によると、雲門、大卷はいずれも堯の樂で、大章はその別称である。また大咸は黄帝、大磬（韶）は舜、大夏は禹、大濩は殷湯王、大武は周武王の樂に、それぞれ当る。
- 8 『韓非子』（内儲説上）に見える話。齊の宣王は竿の大合奏を聞くのを愛好し、いつも三百人の奏者を集めて演奏させていた。城郭の南に住む者はこれに加わることを願ひ出て、喜んで宣王は数百人の者に俸給を与えたという。
- 9 『史記』（田敬仲完世家）に見える話。鄒忌は琴の名手とし

て齊の威王に召し抱えられたが、ことば巧みに音楽と政道の関係を説き、三月で宰相の地位を得たという。

- 10 韓愈「上巳日燕太學聽彈琴詩序」に見える。冒頭に「與衆樂之謂樂、樂而不失其正、又樂之尤也（衆とこれを樂しむこと、これを「樂」という。樂しんでも正しさを失わないこと、これが最上の樂だ）」とある。

- 11 『晏子春秋』（内篇雜上）に見える。晏子が景公を私邸に招くことになり、晏子の家老が酒器を新調する費用を捻出するために新たに税を設けようとしたところ、晏子が「樂しみとは上下ともに樂しむべきものだ」と説き、「今上樂其樂、下傷其費。是獨樂者也（ところが我が君が自分の樂しみを求め、下々はその出費に苦しむことになる。これはひとりだけの樂しみである）」と戒めたという。

〔補説〕

古樂（先王の樂）と新聲（「鄭衛の音」に代表される新興の世俗曲）の峻別は、孔子以来の儒家の定論であるため、この条の「今の樂は猶ほ古の樂のごとし」という孟子の発言は一見それに矛盾する。これについて趙岐は「謂大要與民同樂、古今何異也（重要なことは民衆と一緒に音楽を樂しむなら古樂と今樂に違いはないということだ）」とし、孫奭の「正義」も「今之樂亦若古之聖王之樂也、但其要在能與民同聽樂爲樂耳（今の音樂も昔の聖王の音樂と同じで、重要なことは民衆といっしょに

音楽を聞くことを自分の楽しみとすることにある」という。また陳暘とほぼ同時期の楊時は「音楽は天地の和であり、楽は和を本質とする。人が和であれば気が和し、気が和すると天地の気がそれに応じるのである。もし人々に鐘鼓管絃を聞かせても彼らが頭をかかえて顔をしかめるなら、昔の聖王の楽を演奏したところで政治にとつてなんの益もない。だから孟子はこのような言いかたをして、まずは政道の根本に立ち返らせようとしたのだ」（朱熹『孟子精義』引く）とする。「訓義」の「庶乎王知反本也（王の本に反るを知るをこひねがふなり）」と同じ趣旨である。

南郭の竽と鄒忌の琴の故事を並べて引くのは、孫奭によつたものか。「齊王悦南郭先生吹竽、廩食以數百人、喜鄒忌鼓琴、卒授之國政、是安知與衆樂樂邪」とあり、「訓義」はほとんどこれに類す。

臣請爲王言樂、今王鼓樂於此、百姓聞王鐘鼓之聲管籥之音、舉疾首蹙頰而相告、曰、吾王之好鼓樂、夫何使我至於此極也、父子不相見、兄弟妻子離散。今王田獵於此、百姓聞王車馬之音、見羽旄之美、舉疾首蹙頰而相告、曰、吾王之好田獵、夫何使我至於此極也、父子不相見、兄弟妻子離散。此無他、不與民同樂也。今王鼓樂於此、百姓聞王鐘鼓之聲管籥之音、舉欣欣然有喜色而相告曰、吾王庶幾無疾病與、何以能鼓樂也、今王田獵於此、百姓聞王

車馬之音、見羽旄之美、舉欣欣然有喜色而相告曰、吾王庶幾無疾病與、何以能田獵也。此無他、與民同樂也。今王與百姓同樂、則王矣。

鐘以止爲體、鼓以作爲用。故凡作樂皆曰鼓樂焉。鼓樂所用多矣、獨言鐘鼓管籥、田獵所用多矣、獨言車馬羽旄。蓋鼓樂雖不在鐘鼓管籥、然非鐘鼓管籥、無以示與民同樂於内之意也。田獵雖不在車馬羽旄、然非車馬羽旄、無以示與民同樂於外之意也。周官、田僕馭田路以田、巾車建大麾以田。則所謂車馬、即田路也、羽旄即大麾也。

鼓樂一也、在文王則靈臺以爲樂、在幽王則鼓鐘以爲憂。此無它、樂於内者、與民同不同故也。田獵一也、在秦襄則駟鐵以爲美、在齊襄則盧令以爲苦。此無它、樂於外者、與民同不同故也。今王鼓樂田獵於此、使民有瘁瘁之苦、無欣欣之樂、天性之父母至於不相見、天倫之兄弟天情之妻子至於離散。焉有王者在上、使民至於此極也。孟子并與兩端論之。誠欲其審去取、與民同樂而已。與援文王與桀之事、勸戒梁王同意。

觀宣王社山之獵、父老有至、蠲租役之賜。孟子反謂不與民同樂者、社山之獵所賜、不過父老、是與寡不與衆。雖謂不與民同樂、可也。

鐘鼓言聲、管籥車馬言音者、單出謂之聲、雜比謂之音。鐘鼓以節樂、其聲則單出而已。故言聲。管籥以和樂、其聲則相應而雜比。故言音。然車馬亦言音者、升車則馬動、馬動則鸞鳴、鸞

鳴則和應故也。析而言之、聲與音異。通而言之、聲音一也。故此言管籥之音、詩言嘒嘒管聲。

自事言之、聲音足以樂人之内、田獵足以悅人之外。自道言之、五音適以聾人之耳、田獵適以狂人之心也。

樂書卷第九十一^b。

〔校勘〕

a 底本を除き、「相告」以下が欠落している。欠落は底本の第二葉、第三葉にあたる。四庫全書本には「闕」の注記がある。

b 「樂書卷第九十一」 国会図書館蔵宋刊本「樂書卷第九十一終」、四庫全書本「樂書卷九十一」、方濬師本「樂書卷九十一終」にそれぞれ作る。

〔訳〕

臣、王のために樂を言はんことを請ふ。今、王の樂を此に鼓すに、百姓、王の鐘鼓の聲と管籥の音を聞き、みな首を疾め頰をしかめて相ひ告げて曰く、吾が王の樂を鼓するを好むこと、夫れ何ぞ我をして此の極に至らしむるや、父子相ひ見ず、兄弟妻子離散す、と。今、王の此に田獵するに、百姓、王の車馬の音を聞き、羽旄の美を見、みな首を疾め頰をしかめて曰く、吾が王の田獵を好むこと、夫れ何ぞ我をして此の極に至らしむるや、父子相ひ見

ず、兄弟妻子離散す、と。此れ他無し、民と樂しみを同じくせざればなり。今、王の樂を此に鼓すに、百姓、王の鐘鼓の聲と管籥の音を聞き、みな欣欣然として喜色ありて相ひ告げて曰く、吾が王、疾病無きにちかからんか、何を以て能く樂を鼓せんやと。今、王の此に田獵するに、百姓、王の車馬の音を聞き、羽旄の美を見、みな欣欣然として喜色ありて相ひ告げて曰く、吾が王、疾病無きにちかからんか、何を以て能く田獵せんやと。此れ他無し、民と樂しみを同じくすればなり。今、王、百姓と樂しみを同じくすれば、則ち王たらん。

鐘は〈止まる〉を〈体〉とし、鼓は〈作こる〉を〈用〉とする。それゆえ音楽を演奏することを「樂を鼓す」というのだ。音楽の演奏に使う樂器は多いのには鐘・鼓・管・籥だけに触れており、狩猟をするのに使う器物は多いのに、ここでは車・馬・羽・旄にだけ触れている。音楽の演奏は鐘・鼓・管・籥といった樂器自体にあるわけではないが、これらの樂器によらなくては王が心の中で²民衆と樂しみを共有していることを示すことができな。狩猟は車・馬・羽・旄といった道具自体にあるわけではないが、これらの道具によらなくては王が体で民衆と樂しみを共有していることを示すことができな。『周官』には「田僕の官は田路を馭して田す³。」「巾車の官は大塵を建てて田す⁴」とある。ということとは、『孟子』の「車馬」は「田路」のことであり、「羽・旄」は「大塵」のことである。

音楽の演奏としては同じなのに、文王だと「靈臺⁵」の詩によつて喜ばれ、幽王だと「鼓鐘⁶」の詩によつて悲嘆された。その理由はほかでもない、心の中で音楽を楽しむのに民衆とその楽しみを分かち合ったか合わなかったかの違いによるのだ。狩猟の儀式としては同じなのに、秦の襄公だと「駟鐵⁷」の詩によつて褒められ、齊の襄公だと「盧令⁸」の詩によつてその苦痛を訴えられた。その理由はほかでもない、野外活動で狩猟を楽しむのに民衆とその楽しみを分かち合ったか合わなかったかの違いによるのだ。今もし齊の宣王が音楽と狩猟をおこなった結果、民衆に「瘁瘁の苦しみ」を与え「欣欣の楽しみ」を奪い⁹、天性の結びつきである父母に会うことができず、天倫の関係である兄弟や友情の縁である妻子と離散させてしまったとする。いったいどうして王者が国を統治していながら民衆をこのような困苦に陥らせてしまうのだろうか。孟子は両極端の例を示して説明し¹⁰、民衆といつしよに楽しむ道を選択することを齊王に理解してほしいと心から願つたのである。文王と桀の事例を引き合いにして梁王を戒めた¹¹のと同じ趣旨である。

齊の宣王が社山で狩猟をした時の故事を見ると、父老があいさつにやつて来たので宣王は彼らの租税と徭役を減免してやつた¹²。「このように宣王にも民衆を思いやる行為があつた」にもかかわらず孟子が「民と楽しみをともにしていない」と評したのはなぜか。社山の狩猟の時は、恩寵を施した対象がわずかの父老にとどまっていた。これは少数の者とともに楽しむが、多数とは

楽しみを共有していないということだ。「民と楽しみをともにせず」と言つてよからう。

鐘鼓に対して「声」といい、管籥と車馬には「音」といつて區別しているのはなぜか。単独で発するのを「声」と呼び、他の音といつしよに鳴り響くのを「音」と呼ぶのである¹³。鐘鼓によつて音楽に節目を付けるので、鐘鼓の音は単独で鳴らされる。よつて「声」と呼ぶのだ。管籥によつて音楽に和声を加えるので、その音は複数が互いに響きう。よつて「音」と呼ぶのだ。それでは、車馬についても「音」と言つていい（「百姓、王の車馬の音を聞く」のはなぜか。車に乗ろうとすると馬が動き、馬が動けば鸞という鈴が鳴り、鸞が鳴れば和という鈴がそれに応じる（つまり二種の鈴が鳴り響く）からだ¹⁴。區別するというなら「声」と「音」は異なるが、一括するというなら「声」と「音」は同じものである。それゆえ『孟子』では「管籥の〈音〉」とするが、『詩』には「嘒嘒たる管〈声〉」¹⁵というのである。

現実の世の事に即して考えると、音楽の響きは人の心情を満足させるし、狩猟は人の身体活動を満足させる。しかし「道」の観点から考えると、五音が美しく調和すると人の聴覚をだめにしてしまうし、狩猟がうまくいくと人の心を狂わせてしまう¹⁶。

（樂書卷第九十一）

〔注〕

1 音楽を演奏することを「鼓樂」と称することに對する解釈

- である。趙岐の注には「鼓樂者、樂以鼓爲節也（演奏することとを（鼓樂）と呼ぶのは、音楽は鼓によって拍を整えるからだ）」とある。「訓義」の解釈はこれに異なる。「周禮訓義」（『樂書』卷第五十「鐘師」）にも「鐘以止聚爲義、先儒謂鐘之爲言動也、疎矣（鐘は終息することを本義とする。先儒『白虎通德論』禮樂が（鐘とは動くということ）と説くのはおかしい）」と、「鐘」を「止」や「聚」の義で解している。「鼓」を「作」で解釈するのはこれと対をなす。「訓義」と類似の注解は『孟子』の孫奭の「疏」に見もえる。「云鼓樂者、蓋鍾以止爲體、鼓以作爲用、故凡作樂所以謂之鼓樂也」とあり、「訓義」に酷似する。
- 2 「於内」を心の中（音楽の楽しみ）とし、つづく「於外」は身体活動（狩猟の楽しみ）を指すと考えた。屋内・屋外（あるいは朝廷の内外）と考えることも可能だが、下文に音楽について「樂人之内（人の内を樂しましむ）」、狩猟について「悅人之外（人の外を悦ばしむ）」としているので、ここでの「内外」もそれに従った。
- 3 『周禮』（夏官・田僕）に「田僕、掌馭田路、以田以鄙」とある。「田路」とは王の乗る車の種類で、金や革の裝飾を付けないもの。
- 4 『周禮』（春官・巾車）に王者の五種の車を述べ、その中の「木路」について、「建大麾、以田以封蕃國」という。鄭玄によると「木路」とは「夏官・田僕」の「田路」である。
- 5 「靈臺」は『毛詩』大雅・文王之什に属す。文王が「靈臺」を創建するとき、民衆が自発的に建築に参加し、喜びの音楽が奏でられるさまが歌われている。
- 6 「鼓鐘」は『毛詩』小雅・谷風之什に属す。毛傳は「幽王が諸侯を淮上に会し、淫樂を奏して諸侯に示した。賢者はこれを憂えた」と解する。陳陽「毛詩訓義」（『樂書』卷第六十六）もこれを襲い「幽王が流連の樂をなし、淮水のほとりて鐘を鳴らし、返るのを忘れたことをそしる。鐘を鳴らし、みずから樂しむにとどまらず、人々に勞役を強いてあらゆる樂器を奏した。先王の事績とは似ても似つかぬ（蓋鼓鐘之詩、刺幽王爲流連之樂、鼓作其鐘於淮水之上、樂而忘反者也。非特鼓鐘以自娛、抑又伐磬以勞人而琴瑟笙磬管籥之樂、無不備舉、亦異乎先王所爲而已）」と解している。
- 7 「駟鐵」は『毛詩』秦風に属す。「公の媚子」が狩りをするさまを詠んでいる。「序」は「襄公をほめる詩である。秦がはじめて諸侯に列せられ、田狩の行事と園囿の樂しみをおこなった（美襄公也、始命、有田狩之事、園囿之樂）」という。
- 8 「盧令」は『毛詩』齊風に属す。「序」は「荒をそしる詩。襄公は狩猟を好み、畢弋を使い、民事を顧みなかつたため民衆は苦しんだ。往時を歌って風論した（刺荒也、襄公好田獵畢弋而不脩民事、百姓苦之、故陳古以風焉）」という。
- 9 『莊子』（在宥篇）による言い回し。「昔、堯が天下を統治するとき、天下の人々が欣欣として自分たちの本性を樂しむ

ようにさせた。これは〈恬〉ではない。桀が天下を統治するとき、天下の人々が瘁瘁として自分たちの本性を苦しむようにさせた。これは〈愉〉ではない（昔堯之治天下也、使天下欣欣焉人樂其性、是不恬也。桀之治天下也、使天下瘁瘁焉人苦其性、是不愉也）」とある。ただ『莊子』は「不恬（やすらかでない）」ことも「不愉（たのしくない）」こともいづれも本来のありようからは外れている（「夫不恬不愉、非徳也」とする）。

10 原文は「并與兩端論之」。「并舉兩端論之」に改めるべきかもしれない。

11 「梁惠王章句上」に見える。邸内の庭園で飼育する動物を眺めて梁の恵王が「賢者もこのようなものを楽しむのだろうか」と尋ねたところ、孟子が「賢者であつてこそこのような楽しみがある（賢者而後樂此）」と述べ、文王と桀の事例を挙げて「むかしの賢者はみな民衆といっしょに楽しんだ（古之人與民偕樂、故能樂也）」と説いた。

12 この逸話は『孟子』にはない。『説苑』（善説）に、「齊宣王出獵於社山」に始まる説話が見える。租役の免除を賜った父老十三人が宣王を拝したが、閭邱先生だけは拝さず、政教の得失を巧みに述べて宣王を感服させたという話。また、嵇康「高士傳」（『太平御覽』巻第五百九に引く）、『金樓子』（雜記下篇）にも見える。

13 「声」と「音」の定義は鄭玄（『禮記』樂記の冒頭の注）に

よる。「宮商角徵羽、雜比曰音、單出曰聲」とある。『樂書』卷第六十一（詩訓義）には「単独で発するのが〈声〉で、複数の音がともに鳴るのが〈音〉である。よつて孟子は鐘鼓については〈声〉と称し、管籥については〈音〉と称している（單出爲聲、雜比爲音、故孟子於鐘鼓謂之聲、於管籥謂之音也）」とあり、ここの主旨と呼応する。

14 『禮記』經解「車に升れば則ち鸞和の音あり」の鄭玄注に引く『韓詩内傳』による。「鸞は衡に付いており、和は軾の前に付いている。車に乗ると馬が動き、馬が動けば鸞が鳴る。鸞が鳴れば和が応じる（鸞在衡、和在軾前、升車則馬動、馬動則鸞鳴、鸞鳴則和應）」とある。

15 『毛詩』（商頌・那）の句。「鞀鼓淵淵、嘒嘒管聲」とある。
16 『老子』（第十二章）による。「五色令人目盲、五音令人耳聾、五味令人口爽、馳騁畋獵令人心發狂」とある。

[補説]

「声音」に関する「訓義」の考証の論旨は、孫奭の「疏」にほぼ一致する。「疏」には「蓋鐘鼓言聲、以其聲之單出、故云聲也。管籥車馬言音、以其音之雜比、故云音也。然車馬亦謂之音者、蓋升車則馬動、馬動則鸞鳴、鸞鳴則和應故也。聲之與音、合而言之則聲音一也、別而言之則單出爲聲、雜比爲音。詩言嘒嘒管聲、此言管籥之音、是聲音之通論也」とある。鄭玄の「單出・雜比」説の提示、『韓詩内傳』による

「車馬の音」の解釈、「商頌」の句を引いて「声」と「音」の義が通じることの補足など、「訓義」の文はほぼ「孫疏」の引き写しである。

（二〇〇六、一、一九 二〇〇八、一、一二訂補）